区政会館だより

No.324
平成29年３月

特別区長会事務局
特別区議会議長会事務局
特別区人事・厚生事務組合
公益財団法人特別区協議会
東京二十三区清掃一部事務組合
特別区競馬組合

全国につながる
連携の輪

港区

「豊富温泉体験WEEK」。オープニングセレモニーは悪天候により豊富町長は不参加だったが、港区職員が代行し盛り上がった

行政が仕掛けたビジネスモデル

北区

山形県酒田市で稲刈りを体験する北区の子供たち

歴史がつなぐ３都市との友好交流

北区では味わえない大自然に囲まれた山形県酒田市で農業体験

歴史がつなぐ３都市との友好交流

北区が山形県酒田市・群馬県甘楽町・群馬県中之条町の3都市と友好都市交流協定を締結して、２０１７（平成29）年度で20周年を迎えます。きっかけは3都市それぞれ異なりますが、共通するのは区と市・町が協定を締結する以前から住民同士の交流など古い歴史が土台となっていることです。北区は3都市と協力して、これまでの関係をさらに発展させていこうと意気込んでいます。

20周年でさらなる発展を目指す

学生寮の建設がきっかけに

昨年12月４日、山形県酒田市と北区との交流イベント「ふれあい酒田ＤＡＹ」が北とぴあで開催されました。イベントでは芋煮１００食が無料提供され、多くの区民が長い行列をつくりました。首長にじゃんけんで勝つと酒田の特産物がもらえる恒例のじゃんけん大会も行われ、会場は大いに盛り上がりました。

「ふれあい酒田」は、１９９８（平成10）年11月に設立された酒田市にゆかりのある人の首都圏ふるさと会。毎年12月に北とぴあで「ふれあい酒田ＤＡＹ」を開催し、総会・懇親会を開いています。区が直接共催・後援しているわけではありませんが、区長や区の幹部が出席しているほか、ステージ出演者の調整など事務局の相談にも応じています。

酒田市との交流のきっかけは、戦前にまでさかのぼります。１９２５（大正14）年、北区中里に酒田市を中心とした庄内地方出身者のための学生寮（庄内館）が建設されたことを契機として、酒田市出身の人たちとの交流が始まりました。

１９９２（平成４）年に酒田市が「ふるさと北区区民まつり」に参加したことで交流がさらに活発になり、その後も、交流が続いています。

小５社会教科書で庄内平野の米づくりが紹介され、全国から酒田市農政課に農業に関する問い合わせが多数あったことから、市が田植えと稲刈りに首都圏の小学生を招待する事業を開始し、１９９３（平成５）年

から3年間、北区の子どもたちが参加。1995（平成7）年には北区が酒田市の小学生を招待しました。翌年以降も、青少年地区委員会に委託して、お互いに小学生を受け入れる交流が2015（平成27）年度まで続けられてきました。

区と町が共同出資した施設

群馬県甘楽町に「甘楽ふるさと館」という宿泊施設と体験実習棟からなる複合施設があります。隣接したせせらぎでは、マスのつかみ取りができ、自らさばいて、炭焼きにします。マスが焼き上がるまでは館内のお風呂でリラックス。さらに牛肉や豚肉でバーベキューも楽しめます。そば打ちやコンニャクづくり体験、リンゴ狩りにサツマイモ掘りも。日帰りはもちろん、宿泊も可能です。

甘楽ふるさと館は、北区と甘楽町が共同出資により総工費3億円をかけて1988（昭和63）年4月に建設。交流事業の拠点施設として、様々な農村の生活体験やふれあいの場として利用されており、北区と甘楽町を結ぶコミュニケーション施設として重要な役割を果たしています。

最近では、2014（平成26）年に近隣の富岡製糸場と絹産業遺産群が世界遺産に登録され、世界遺産見物の帰りに甘楽ふるさと館に立ち寄る観光客も増えているそうです。利用料金は北区民と甘楽町民なら、1泊2食の宿泊で大人5400円（一般7020円）、日帰り利用で大人324円（一般540円）と割安です。

区の担当者によると、東京の基礎自治体が交流自治体との共同出資で、地方にこうしたレクリエーション施設を建設する事例は珍しいのではないかとのことでした。

北区と甘楽町との交流は、1984（昭和59）年、区民が良好な自然環境の中で、スポーツレクリエーション施設を楽しむ自然休暇村構想を検討していた北区と、特定都市との交流で農業を活性化させたい甘楽町との思惑が一致し、始まりました。1985（昭和60）年には区民自然休暇村試行事業の協定を締結。翌年、自然休暇村事業協定を締結しました。阪神・淡路大震災が発生した1995（平成7）年10月には災害時相互応援協定を結んでいます。

1995（平成7）年からは、北区の小中学校に設置した生ゴミ処理機から出たコンポストを甘楽町に運び、肥料にし、その肥料でできた野菜や果物を給食の食材に利用したり、区のリサイクル拠点「エコー広場館」で販売しています。

実は甘楽町と北区との関係も戦時中までさかのぼります。

1942（昭和17）年、戦局の悪化に伴い東京を始めとした大都市に連合軍のB29爆撃機による空襲が始まりました。都は「東京都学童疎開本部」を設置し、初等科3年生から6年生までの児童を集団疎開させることを決めました。当時の北区は、王子区と滝野川区に分かれていて、両区ともに疎開先には群馬県が割り当てられました。当時の資料によると、滝野川区が4100人、王子区が9300人でした。王子区が多かったのは、軍関係の施設が多く、空襲の目標にされるためでした。

甘楽町にも当時、北区の児童が疎開しました。

花川区長にジャンケンで勝つと酒田の特産品がもらえる。ふれあい酒田DAYで

北区と甘楽町が共同出資して建設された甘楽ふるさと館には多くの観光客が訪れます

北区との交流が始まった翌年の１９８５（昭和60）年５月、戦時中に甘楽町小幡に学童疎開していた児童（当時、王子区立第二岩淵国民学校の５・６年生）が訪れ、疎開先だった町内の寺院や民家に宿泊し、住職や友人たちと再会し、旧交をあたためました。

中之条町の「親子ふるさと体験事業」は関係する職員が総出で歓迎してくれます

約2千人が学童疎開した町

群馬県中之条町もかつて、北区滝野川地区の小学生約２千人が中之条町の四万温泉を中心に学童疎開をしていた町です。これが縁となり、現在ではこれらの人たちが当時を偲び、中之条町を同窓会や家族旅行などで訪れています。１９８６（昭和61）年、北区長を始め当時の疎開児童２５０人が中之条町の合併30周年記念事業（第二のふるさとでの集い）に招待されたことが、交流のきっかけとなり、１９８８（昭和63）年から児童交流事業が始まりました。

「親子ふるさと体験事業」は、中之条町が１９９５（平成７）年から独自に実施していた山村地域都市交流事業「農業体験ツアー」に北区が参加者を公募する形で、１９９９（平成11）年から始まりました。毎年夏に北区在住の親子約50人が中之条町での２日間にわたる自然、農業、暮らしに触れ、ふるさとを感じる体験活動に参加しています。人気の高い事業で、例年、定員に対して４～５倍の倍率の応募があるそうです。町側は関係する職員が総出で北区からのツアー客を歓迎し、対応してくれます。

区の担当者は「地方都市との交流は、都会では味わえないことを地方で経験できることがメリット。地方の交流都市にとってもＰＲにつながる。中之条町の職員の方も気さくで、参加した区民の方を暖かく迎えてくれます」と話します。

新たに1都市と協定締結目指す

北区が酒田市、甘楽町、中之条町の３都市と友好都市交流協定を締結したのは、１９９７（平成９）年。友好都市としての交流は20年ですが、どの都市も協定締結のはるか昔から地域の住民同士がつながり、友情を深めてきました。現在、20周年に向けて３都市の魅力を伝えるＰＲ動画を作成しています。

北区では「北区中期計画（平成29年度～31年度）」で２０１９（平成31）年度末までに新たに１都市との協定締結を目指しています。

また、北区も他区と同様、他自治体との連携の在り方を模索しています。２０１６（平成28）年度には新規事業として交流の在り方を検討するための研究会を設置しました。今後、この研究会での検討結果も踏まえ、歴史がつないだ三つの友好都市との「きずな」をさらに確かなものにしていくとともに、新たな都市との連携・交流を視野に、東京を含む全国各地域がともに発展・成長し、共存共栄を図ることができるよう取り組んでいく考えです。